

富山県

婦中町外輪野地区

埋蔵文化財予備調査概要

上地土遺跡

甯谷遺跡

小龍谷遺跡

1979年3月

婦中町教育委員会

外輪野の丘に立ちて

婦中町は、古くから人類にとって住みやすい所であったようです。現在の平野部には山田川、井田川そして神通川が流れ呉羽丘陵づたいに先住民の遺跡が多数確認されております。

滝谷、小滝谷、上池上遺跡はその代表的な遺跡のひとつで、ここに外輪野地区は場整備及び音川中学校が建設されることになりました。

遺跡は私達の祖先の生活を知ることのできる貴重な文化財ですが、近年音川地区の農業改善等地域振興も同様に大切なことであります。そこで、婦中町教育委員会と外輪野土改が協議を重ね調査を開始し、その結果、先住民の居住跡などが発見されたことから、再度協議を重ね、一部を現状のまま保存することになりました。

開発と保存という大変むずかしい問題の中で互いに双方の立場を尊重し、理解しあうことで問題を解決いたしました。

本書が私達の祖先、郷土を知るよりよい資料となることを期待するとともに保存した地域が町民の皆様の文化財の生きた資料として活用されることを願ってやみません。

最後に発掘調査に際し格段の御助力をいただいた富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事橋本・上野・岸本・神保・酒井・岡上・久々氏をはじめ、心よく調査に協力いただいた地元の皆様及び外輪野土地改良区など関係各位に深く感謝の意を表わします。

昭和54年3月

婦中町教育委員会
教育長 横野尚文

例 言

1. 本書は、婦中町音川地内に所在する、滝谷遺跡、小滝谷遺跡、上池上遺跡の発掘調査概要である。
2. 滝谷・小滝谷遺跡は、は場整備事業に、上池上遺跡は、小学校敷地造成に先立づく試掘調査及び記録保存調査であり、その期間は下記のとおりである。

滝谷遺跡

第1次調査	昭和51年5月25日～同27日
	タ 7月5日～同8日
第2次調査	タ 7月16日～同24日

小滝谷遺跡

第1次調査	昭和51年5月28日
	タ 7月29日～同13日
第2次調査	タ 7月16日～同24日

上池上遺跡

第1次調査	昭和53年5月25日～6月16日
第2次調査	タ 8月9日～9月25日

3. 調査は、婦中町教育委員会が主催し、文化庁記念物課、富山県教育委員会文化課、埋蔵文化財センターの指導と、外輪野地区土地改良区の協力を得て実施した。

滝谷・小滝谷遺跡については、昭和51年度国庫補助金、県費補助金の交付を受けた。

4. 調査参加者は下記のとおりである。

滝谷 遺跡

第1次調査	神保孝造、酒井重洋（富山県教育委員会文化課（兼）埋蔵文化財センター）
第2次調査	橋本正、岡上進一、久々忠義（同上）

上池上遺跡

第1次調査	上野章（富山県教育委員会文化課（兼）埋蔵文化財センター）
第2次調査	久々忠義（富山県埋蔵文化財センター）（以上調査担当者）

（地 元）

高野善和、五十嵐剛、山中剛、田中正雄、平野孝一、平野昇、宮本兼行、宮本博行、寺山裕一、谷口勉、若瀬功夫、奥村仁志、高畠信雄、奥村つや、奥林ナミ子、奥村和子、吉田菊美、若瀬タキ、岩瀧すきえ、岩瀧やよい、谷井なをゑ、滝井すみ、平井喜美子、五十嵐あや子、清水三枝子、五十嵐幸子、平野きよみ（順不同）

5. 調査事務局は、婦中町教育委員会に置き、庶務は委員会職員の協力を得て、係

長大上正弘、社会教育主事西田均が担当し、教育長牧野好道が総括した。なお、滝谷・小滝谷遺跡については、富山県教育委員会文化課森田文夫氏、岸本雅敏氏の、上池上遺跡については、県教育委員会文化課（兼）埋蔵文化財センター竹内俊一・川口稔氏の指導、協力を受けた。

6. 遺跡での写真撮影、構造実測図は、各調査担当者が行い、本書の執筆、図版作成にあたっては、柳井睦、橋本正春氏ら埋蔵文化財センター職員の協力を得て、各調査担当者が行った。

目 次

外輪野の丘に立ちて

例 言

I 遺跡の環境	1
第1図 地形と周辺の遺跡	1
II 歴史的環境	2
表1 時代の推移と県内の遺跡	2
第2図 婦中町の遺跡と遺物	3
III 調査の概要	4
IV 遺 跡	5
1. 上池上遺跡	5
第3図 地形と発掘区	5
第4図 発掘区全景（西より）	5
第5図 遺構配置図	6
第6図 遺構実測図	6
第7図 上池上遺跡出土の遺物	7
2. 滝谷遺跡	8
第8図 地形と発掘区	8
第9図 住居跡と作業風景	9
第10図 遺構配置図と遺物の出土状況	10
第11図 滝谷遺跡出土の遺物	11
第12図 磁照寺I式の土器	12
第13図 滝谷遺跡出土の土器群	13
第14図 滝谷遺跡出土の遺物	15
3. 小滝谷遺跡	16
第15図 地形と発掘区	16
第16図 住居跡と作業風景	17
第17図 遺構配置図	18
第18図 遺構・遺物の検出状況	19
第19図 小滝谷遺跡出土の土器	20
第20図 小滝谷遺跡出土の土器群	21
第21図 小滝谷遺跡出土の土器	23
第22図 石鍤の重量分布図	24
第23図 石鍤の長さと巾の関係図	24
第24図 小滝谷遺跡出土の石器	24
第25図 小滝谷遺跡出土の石器	25
V まとめ	26
引用・参考文献	26

I 遺跡の環境

婦中町は、富山県の中央部に位置し、井田川、神通川によって形成された平野部と呉羽丘陵から牛岳へと連なる丘陵部とに分かれる。この丘陵部を横切って山田川が流れていって、河岸段丘面を形成している〔婦中町史 1967〕。

上池上(かみいけじや)・滝谷(たきだに)・小滝谷(こたきだに)の各遺跡は、山田川の河岸段丘左岸上にあり、婦中町外輪野(ほかいの)地区の小字上池上・滝谷・小滝谷地内に所在する。

上池上遺跡の標高は、約116m。その他の遺跡は、100~110mであり、前者は、後者より一段高い段丘上にある。

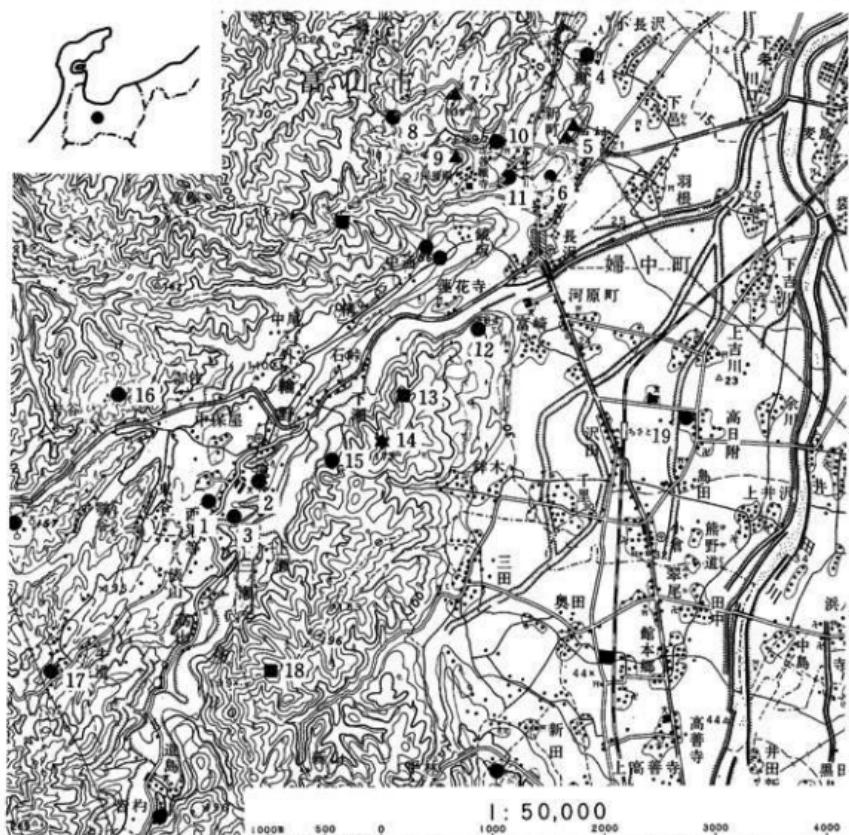
さて、婦中町には、各時代にわたって遺跡が点在している。

先土器時代の細谷遺跡は、丘陵部にあり、出土遺物の大半が石核と剣片であることから、石器製作の場所として考えられている〔山本他 1978〕。

縄文時代の遺跡は、呉羽丘陵の山麓部(二本榎遺跡・中期~後期・各願寺前遺跡・中期~後期・古里保養園前・中期中葉)と山田川の河岸段丘上(牛滑遺跡・中期~後期)にある。特に、中期の遺跡が多い。

弥生時代には、丘陵部にある保養園前遺跡と平野部にある高日附遺跡がある。

その他、王塚・勅使塚(古墳時代)、下瀬遺跡(平安時代)がある。安田城跡は、中世末から近世初にかけての平地城館である。(岡上)

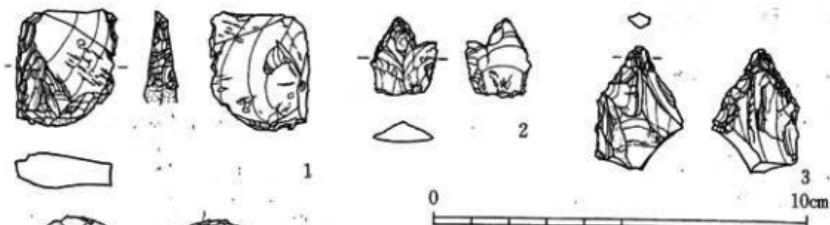


第1図 地形と周辺の遺跡 1.上池上 2.滝谷 3.小滝谷 4.二本榎 5.添ノ山古墳群 6.千坊山 7.王塚古墳
8.三熊糞跡 9.勅使塚古墳 10.各願寺前 11.古里保養園前 12.富崎A 13.滝山城跡 14.ゴダイ塚 15.下瀬
16.細谷 17.牛滑 18.高山城跡 19.高日附

II 歴史的環境

年代	時代・時期	時代の推移	県内の遺跡	婦中町の遺跡
BC 30,000 	先土器時代	無土器、打製石器の使用 石刃、ナイフ形石器文化 弓矢の発明	眼目新丸山(上市) 直坂(大沢野) 立美(城端)	細谷
BC 10,000	縄文時代 草創期	土器の出現、磨製石器の盛行 隆起縄文土器・柳葉形尖頭器 洞穴に住む。	東殿(福光)	千坊山
	早期	回転押型文土器・尖底土器 竪穴住居の使用	桜崎(魚津) 直坂(大沢野)	
BC 4,000	前期	複雑な縄文をつけた土器 植物繊維含有の土器 海進が進む。貝塚の形成	極楽寺(上市) 蜆ヶ森(富山) 吉峰(立山)	細谷
BC 3,000	中期	装飾性の強い土器が盛行 集落の数・規模が大きくなる。	嚴照寺(砺波) 下山新(朝日) 不動堂(朝日) 天神山(魚津) 水上谷(小杉) 松原(庄川) 串田新(大門)	上池上・滝谷 小滝谷・牛滑
	後期	土器の器形の種類が多くなる。 まじない用の石器が増える。	本江・広野新(滑川)	
	晩期	龜ヶ岡文化の波及 御物石器	愛本新(宇奈月) 井口(井口) 勝木原(高岡) 丸山A(上市)	二本榎 各顧寺前 二本榎
BC 300 	弥生時代	稻作の開始 鉄器・青銅器の使用 方形周溝墓の盛行	大境(氷見) 石塚(高岡) 圓山(小杉)	古里保養園前 高島附
AD 400 	古墳時代 飛鳥・白鳳時代	古墳の出現 集落の大型化 須恵器の製作開始	桜谷古墳(高岡) 上野(小杉) 金草窯跡(富山)	勅使塚・王塚古墳 千坊山 友坂熊野山古墳群 二本榎
AD 701 	奈良・平安時代	律令体制、荘園の発達	じょうべのま(入善) 高瀬(井波) 利田(立山)	熊野山 千坊山 下瀬
AD 1,192 	鎌倉・室町時代	武家社会の成立と展開	日の宮(小矢部) 早舟上野(魚津) 白鳥城(富山) 大山谷城(富山)	ゴタイ塚 長沢城 富崎城 安田城

表1 時代の推移と県内の遺跡



▲細谷遺跡出土の先土器時代石器 (%)
1、2.ナイフ型石器 3.揉錐器 4.搔器



牛滑遺跡の復元住居跡▶



◀王塚古墳（前方後方墳）



安田城本丸跡▶

第2図 妻中町の遺跡と遺物

III 調査の概要

1 上池上遺跡（1次調査）

1. 所在地 婦負郡婦中町上池上 2. 調査期間 1978年5月25日～1978年6月16日（延4日間） 3. 調査担当者 上野 章（富山県教育委員会） 5. 発掘面積 約220m² 6. 時代・時期 繩文時代（中期） 7. 調査の契機・目的 小学校敷地造成に先立つ試掘調査 8. 調査の方法 旧地形及び黄褐色粘質の残存する部分を対象とし、造構の有無の確認を行うため、1.5～1m幅のトレンチを入れた。 9. 立地 台地上、標高約116m 10. 地目・旧状 水田 11. 調査後の現状 学校敷地 12. 造構 埋甕1 13. 遺物 繩文土器 14. 備考 調査対象地は、昭和51年度のほ場整備事業で造成がなされ、丘陵先端部等の一部に旧地形を残していた。
(上野)

2 上池上遺跡（2次調査）

1. 所在地 婦負郡婦中町上池上 2. 調査期間 1978年8月9日～1978年9月25日（延11日間） 3. 調査担当者 久々忠義（富山県教育委員会） 4. 遺跡の範囲・大きさ 約50m² 5. 発掘面積 約860m² 6. 時代・時期 繩文時代（中期） 7. 調査の契機・目的 小学校敷地造成に先立つ記録保存調査 8. 調査の方法 調査対象地に対して1.5～4m間隔にトレンチを設定し、造構の拡がる範囲を確認する。その後、その部分の全面発掘を行う。 9. 立地 山田川左岸の台地上 10. 地目・旧状 水田 11. 調査後の現状 小学校敷地 12. 造構 繩文時代の穴2ヵ所 13. 遺物 繩文土器、石鎚、擦石、玦状耳飾
(久々)

3 滝谷遺跡（1次調査）

1. 所在地 婦負郡婦中町滝谷 2. 調査期間 1976年5月25日～1976年7月8日（延7日間） 3. 調査担当者 神保孝造（富山県教育委員会） 4. 遺跡の範囲・大きさ 約200m² × 60m 5. 発掘面積 約706m² 6. 時代・時期 繩文時代（中期） 7. 調査の契機・目的 外輪野中部地区団体営ほ場整備事業に先立つ予備調査 8. 調査の方法 8～10m間隔で1m × 1mの試掘区を146ヵ所設ける。 9. 立地 東西南北約100m、南北約150mの台地上中央部に谷がある。標高約100m 10. 地目・旧状 水田・畑地 11. 調査後の現状 ほ場整備事業実施後水田、遺跡は水田下に保存 12. 造構 住居跡1棟 13. 遺物 繩文土器（繩文時代中期前葉）・石器（磨製石斧）
(神保)

4 滝谷遺跡（2次調査）

1. 所在地 婦負郡婦中町滝谷 2. 調査期間 1976年7月16日～1976年7月24日（延4日間） 3. 調査

担当者 岡上進一・久々忠義（富山県教育委員会）

4. 遺跡の範囲・大きさ 約900m² 5. 発掘面積 約50m² 6. 時代・時期 繩文時代（中期） 7. 調査の契機・目的 ほ場整備事業に先立つ記録保存調査 8. 調査の方法 1次調査で検出された住居跡の全面発掘 9. 立地 山田川左岸の河岸段丘上 10. 地目・旧状 水田 12. 造構 住居跡2棟、穴1基 13. 遺物 繩文土器、磨製石斧、土偶
(久々)

8

5 小滝谷遺跡（1次調査）

1. 所在地 婦負郡婦中町小滝谷 2. 調査期間 1976年5月28日～1976年7月13日（延7日） 3. 調査担当者 神保孝造（富山県教育委員会） 4. 遺跡の範囲・大きさ 約200m × 80m 5. 発掘面積 約168m² 6. 時代・時期 繩文時代（中期） 7. 調査の契機・目的 外輪野中部地区団体営ほ場整備に先立つ、予備調査 8. 調査の方法 8～10m間隔で1m × 1mの試掘区を83ヵ所設定。その後、補足調査として、1m幅のトレンチを本設ける。 9. 立地 東西南北約100m、南北約200mの台地上、標高約110m 10. 地目・旧状 水田 11. 調査後の現状 ほ場整備後水田。遺跡は水田下に保存。 12. 造構 住居跡3棟、穴3ヵ所 13. 遺物 繩文土器（繩文中期前葉～中葉）、石器（石斧、凹石、石錐）石錐の出土が多く注目される。
(神保)

6 小滝谷遺跡（2次調査）

1. 所在地 婦負郡婦中町小滝谷 2. 調査期間 1976年7月16日～1976年7月24日（延4日） 3. 調査担当者 岡上進一・久々忠義（富山県教育委員会） 4. 遺跡の範囲・大きさ 約50m × 250m 5. 発掘面積 約40m² 6. 時代・時期 繩文時代（中期） 7. 調査の契機・目的 県営ほ場整備事業に先立つ記録保存調査 8. 調査の方法 第1次調査で確認された住居跡（繩文時代中期中葉）・穴を全掘した。 10. 地目・旧状 水田 11. 調査後の現状 水田 12. 造構 住居跡1棟、穴2ヵ所 13. 遺物 繩文時代の土器（中期前葉・中葉、後期初頭）と石器（磨製石斧、石錐、石鎚、凹石） 14. 備考 発掘調査地点は、全体に削平を受けていたが、住居跡は、その掘り込みが深く、残存状況もよい。
(岡上)

IV 遺 跡

1 上池上遺跡

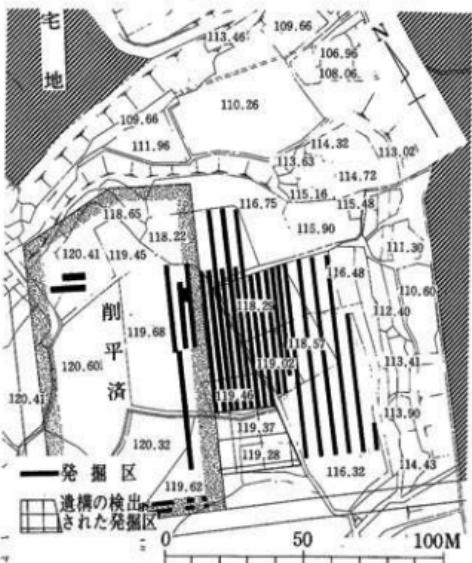
遺構

発掘した遺構は、すべて径1m以下の穴で、比較的形の整ったもの五つ、うち遺物を含み時期の判明するもの二つである。

穴-01 85cm×75cmの隅円方形で、平坦な底部がやや広いフラスコ状ぎみの穴である。底面にはさらに径15cmの円形の穴があいており、深さ50cm以上も斜めにのびる。穴-01の覆土堆土後に空洞の状態で検出された。人為的な掘り込みではなく、杭状のものが打ち込まれてあったのが腐敗した結果と思われる。穴-01に伴う施設の痕跡であろうか。覆土中の土器の特徴から、縄文時代後期後葉に属する。(第5図)

穴-05 径25cmの円形の穴。調査時にはすでに半壊していた。中には、穴の形にあわせたように土器が埋設されていた。土器は完形ではないが、何らかの意図をもって穴に埋置された埋甕と考えられる。その土器の特徴から、縄文時代中期前葉に属する。(第5図)

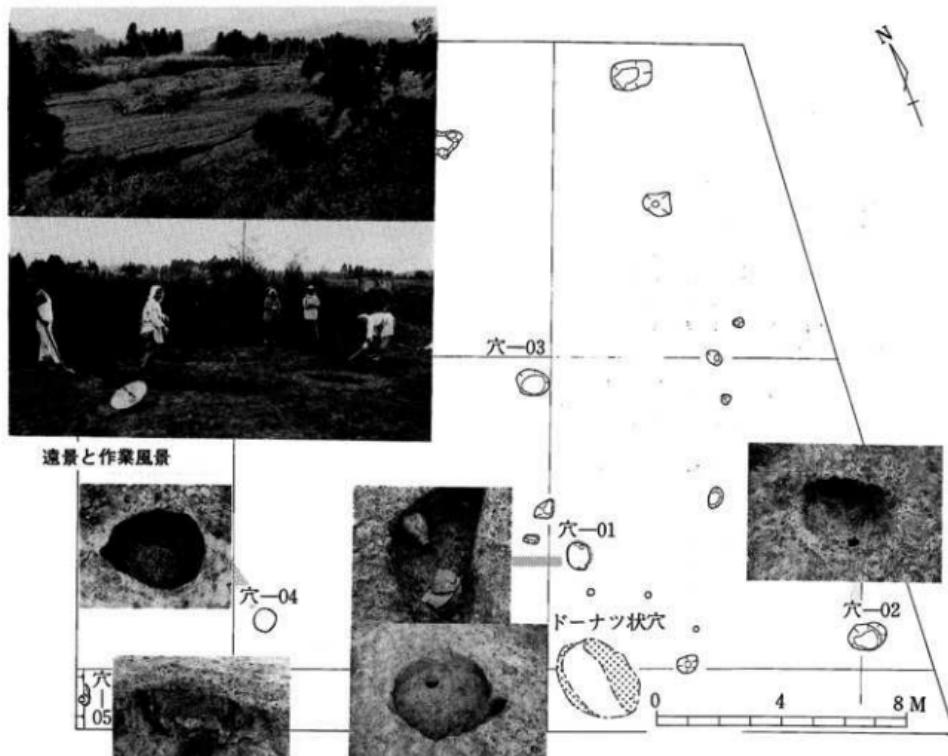
(久々)



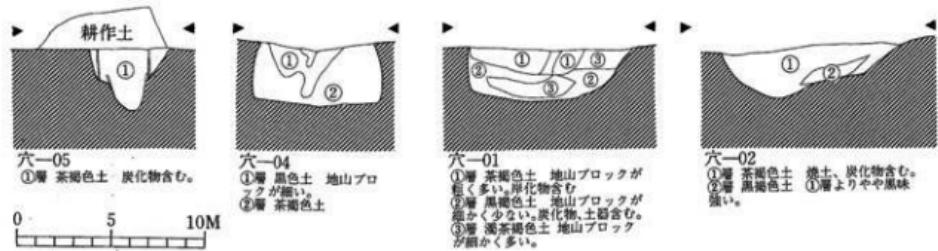
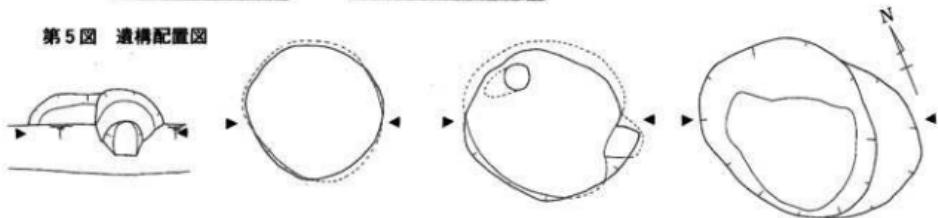
第3図 地形と発掘区



第4図 発掘区全景（西より）



第5図 遺構配置図



第6図 遺構実測図

遺物

遺物は、耕作土と穴の覆土中から出土した。すべて縄文時代に属する。

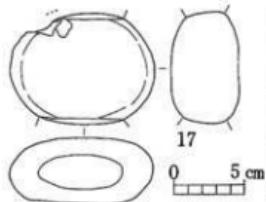
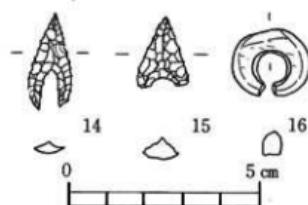
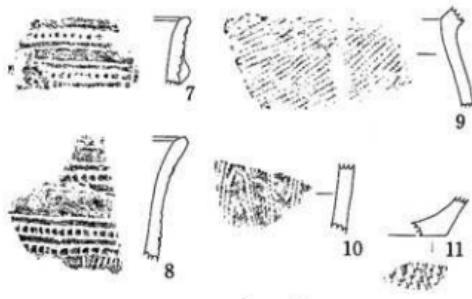
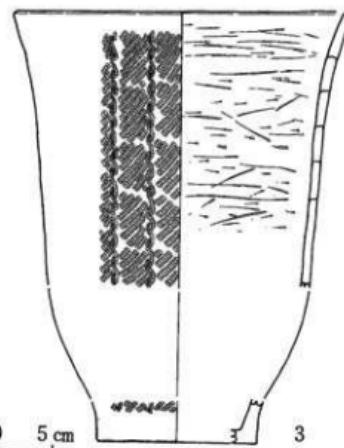
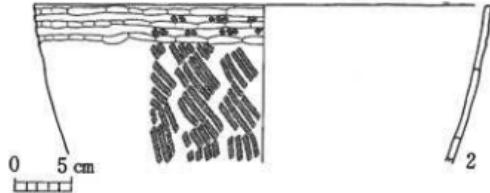
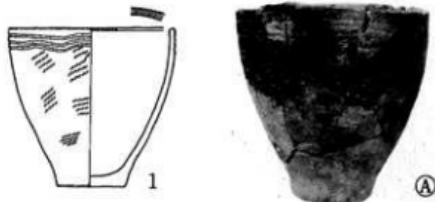
縄文土器（第7図）

中期前葉 半截竹管による半隆起線と爪形文、木目状燃文などの文様構成、厚手の器壁、胎土の特徴は、從来新崎式と呼ばれた範囲にはいる。さらに、城端町西山B、砺波市嚴照寺遺跡の調査から、これを二期に細分する考え方がある。それに従えば、嚴照寺I式と称する古い段階にあたる。〔神保他1976・1977〕結節縄文を施す穴一〇五の埋甕も同期に含む。

後期後葉 穴一〇一の二個体だけである。薄手のつくりで、縄文地に口辺部は三条の浅い沈線をめぐらす。井口II式と呼ばれるものに零匂気が似る。〔小島1966〕

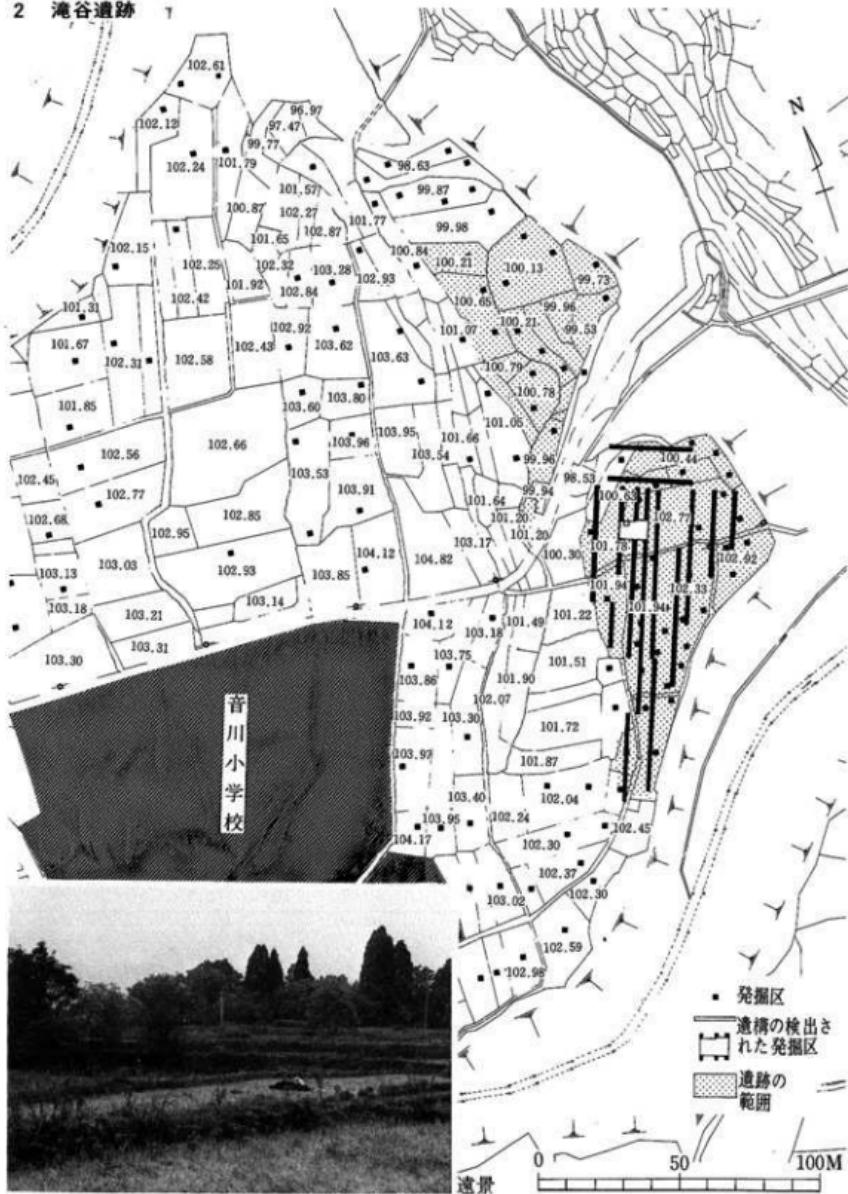
石器（第7図）

石鏃二個、擦石1個、玦状耳飾1個がある。玦状耳飾は、城端町ウワダイラD遺跡で同様のものがある。〔上野他1976〕



第7図 上池上出土の遺物

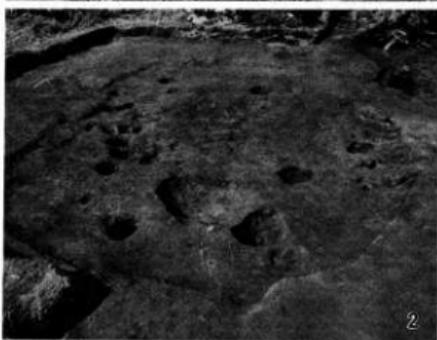
2 滝谷遺跡



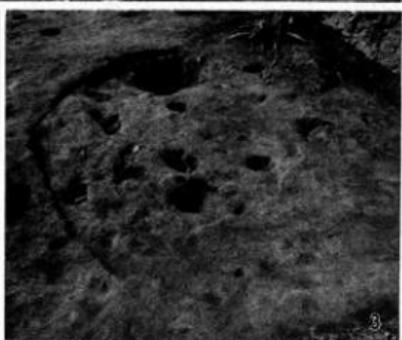
第8図 地形と発掘区



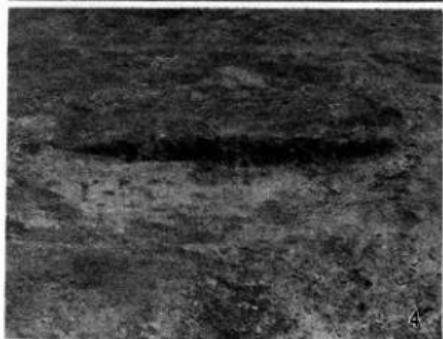
1



2



3

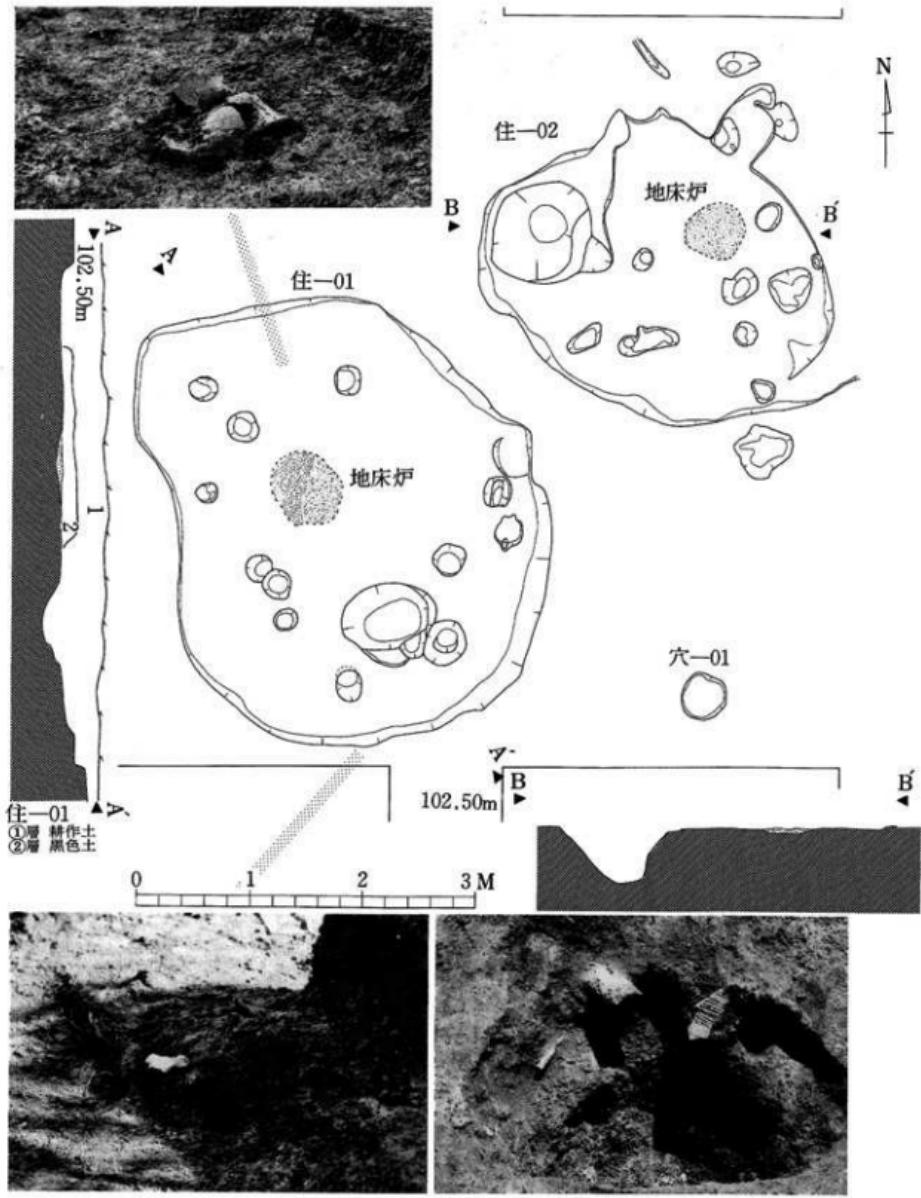


4



5

第9図 住居跡と作業風景 1.全景 2.1号住居跡 3.2号住居跡 4.地床炉 5.作業風景



第10図 造構配置図と遺物の出土状況

構造

住居跡二つ、穴一つを確認し、すべて完掘した。耕作により、平面形も判然とはつかめないほどに擾乱を受けている。

住-01 3m × 4m の長円形を呈する。主柱本数を六本とり、「主軸にもっとも近く対峙する主柱に持たせた二つの屋根柱を叉状に組み」、それで棟木を支える「棟木支え型」X型が復元される。〔橋本1974・1976〕炉は、中央に一つあり、床面を浅く凹めただけの地床炉で、底面は焼けている。

長軸上の南端には、径60cm、深さ20cmの穴があけられている。

住-02 平面規模、主柱本数、棟木支え型いずれも不明であるが、住-01とほぼ同規模、同型の住居跡であろう。炉は、地床炉。長軸上の西端には、径80cm、深さ50cmの穴があり、住-01の穴に比べやや深く大きい。

穴-01 径40cmの円形の穴である。

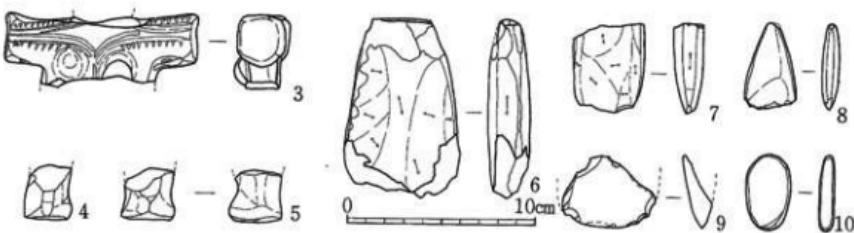
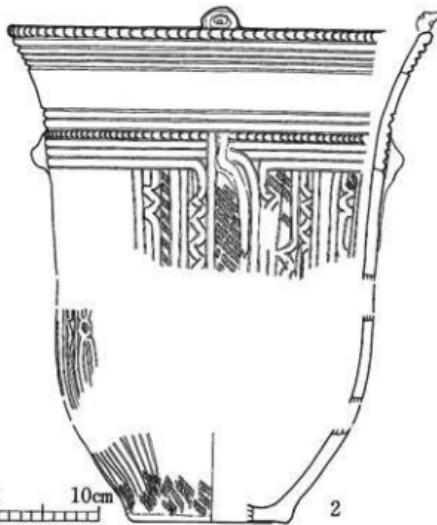
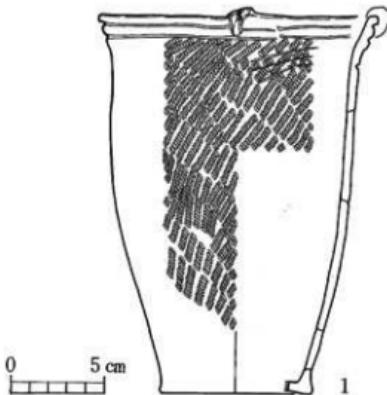
以上の遺構は、すべて覆土中から、嚴照寺I式にあたる土器が出土しており、縄文時代中期前葉に属する。住-01・02において、出土土器が相互に接合するものがある。周囲に未掘の住居跡はなく、2棟を1単位とする生活単位を考えられる。

同時期に属する住居跡は、立山町吉峰、砺波市嚴照寺、城端町西山B遺跡などで検出されているが、地床炉をもち、長軸上に貯蔵穴と考えられる穴をもつ同一型のものであり当遺跡のものと共通する。

遺物

土器 住居跡の覆土内から縄文時代中期前葉の資料が一括出土している。他に、同中期中葉の土器が試掘区から出土しているが、1点にすぎない。

縄文時代中期前葉の土器 (第11図、第13図) 出土した土器は当遺跡の西方約9kmに所在する砺波市嚴照寺遺跡第I期の土器群〔神保他1977〕に類似している。全て深鉢形土器



第11図 滝谷遺跡出土の遺物

の破片で、色調は褐色・暗褐色を呈し、同一個体と考えられる個体が多い。土器は復元可能な二個体以外は大半が細片であるため、その整理にあたっては巖照寺遺跡の成果〔神保1977〕に基づいた(第12図)。以下それを概観しておく。

器形 土器は全て平縁で、その大半は口唇部に突起がつく可能性が強い。器形はA円筒形の胴部に頸部で急激に外反・屈曲するキャリバー状の口部がつくもの、B円筒形の胴部にやや外反する口縁部がつくもの、C円筒形のものに三区分できる。その割合はB・Aが大半を占めCは少ない。器厚・法量にも大小差が認められるが、器形との関係は、判然としない。

施文 半截竹管文を主体とするもの(第11図、第13図1・6)、縄文を主体とするもの(第13図14・16)に大別される。このうち半截竹管文を主体とするものは、口縁部と胴部に文様帯が分れる。口縁部文様帯は数条の半截竹管文を横走させ、周囲4ヵ所で縦位の隆帶や突起で区画する。その区画内を無文帯としたり、格子目状沈線・逆蓮華文、縄文と半截竹管文を組む文様(1・8・15)等を施文する個体が一般的である。胴部文様帯は斜縄文・木目状捺糸文など縄文のみ施文するもの(2・16)、縄文地へ半截竹管文によるB字状の区画を施すもの(11)がある。A器形の場合には縄文のみを施文する傾向が強い。

一方、縄文を主体とする土器は口唇部外面へ粘土帯を貼り付けて隆帶状にし、器面全体へ斜縄文・縦位の羽状縄文を施すものが大半を占める。

縄文時代中期中葉の土器 (第14図3の右下)口縁部へ幅広の半截竹管文を横走させ、胴部は縦位の縄文を転す。中期中葉でも後半期にはいる深鉢形土器であろう。

中期前葉の土器群について 滝谷遺跡の大半を占める中期前葉の資料は、従来の土器編年から従え

ば新崎式土器として画一的にとりあつかわれてきたものである。しかし、近年、新崎式の再検討〔小島1974〕が進む中で、神保は広義の新崎式土器における土器製作の第2・第3段階〔橋本1968〕での技術的差異を認め、それを時期差としてとらえた。そして、その内容的にまとまりのある巖照寺遺跡の資料をもとに巖照寺I・II・III式を仮称している〔神保他1977〕。その考え方に基づけば、本遺跡の土器は広義の新崎式土器でも古手に対比し、巖照寺I式土器(第12図)に比定されよう。

類似資料としては、城端町西山B遺跡〔上野他1976〕、砺波市宮森新北島I遺跡〔神保他1978〕、石川県中平遺跡〔沼田1976〕等がある。しかし類似資料が増加するなかで、他地域との対比や、前後の土器形式との関連などは今後に残す課題としたい。(神保)

土偶(第11図3~5)

3は、胸部で、両腕を水平に広げている。頭部・胴部は、欠損している。住-01の南壁面に接して出土していることから、所属時期は、中期前葉であろう。4~5は、足の部分である。4は、住-02のふく土上面、5は、住-01のふく土上面より出土していて、3~5は、それぞれ出土点地が異なるが、同一個体であろう。

石器(第11図6~10)

磨製石斧(6~8) 6・7の石材は、蛇紋岩である。6は、住-02内の穴より出土していることから、中期前葉であろう。8は、後・晩期に属するものであろうか。

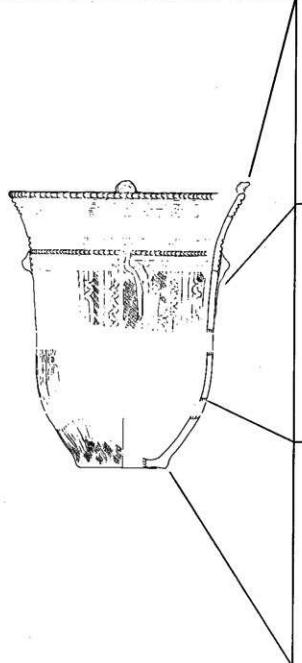
打製石斧(9)

その他、10は、砂岩系の石材であり、だ円形の側面全体に磨耗痕がある。一部に炭化物が付着しているところがある。

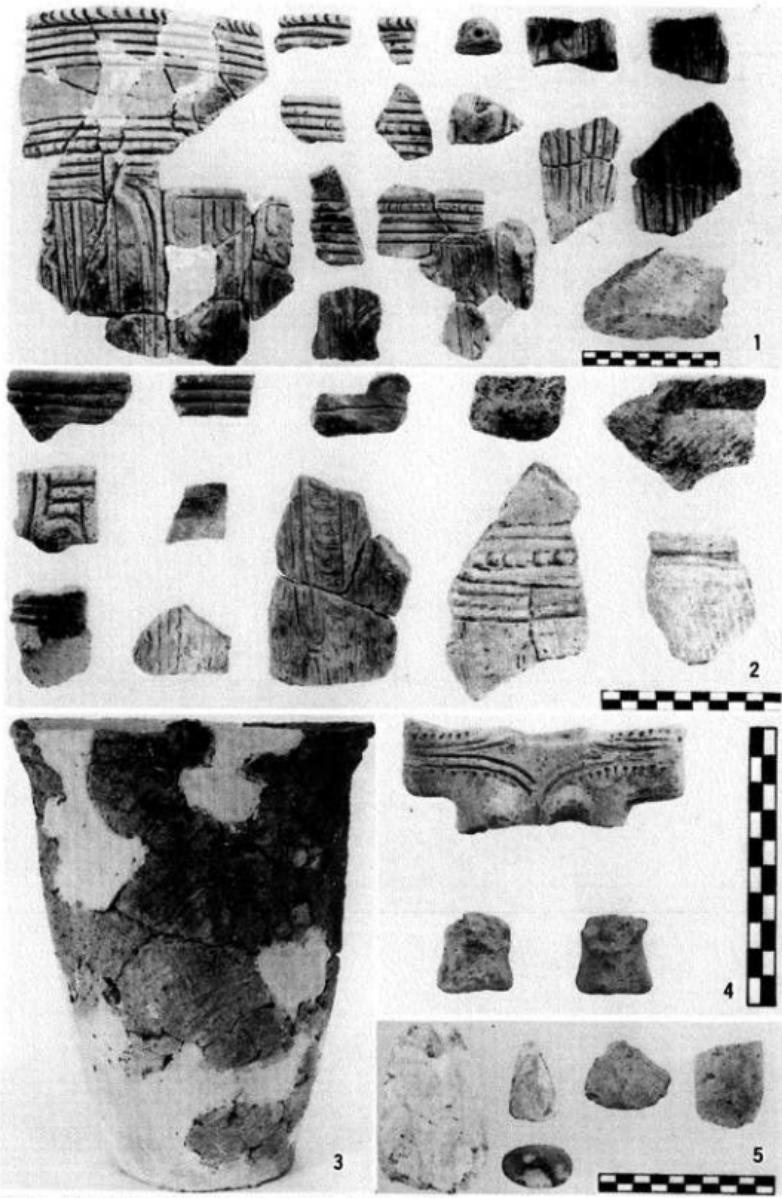
(岡上)



第12図 巖照寺I式の土器(16) 巖照寺(2.4.6.8~10.13.14)・西山B(1.5.11.15)・ウワダイラD(7.12)・宮森新北島I(3)

器種と器形 (鐵照寺遺跡出土の土器)	深鉢形土器			浅鉢形土器
	A	B	C	
	口縁部	1, 4, 5, 6, 7, 8, 14	9, 10, 11, 12	15, 16, 17
	胴部	2	13	
	底部	3		

第13図 渥谷遺跡出土の土器群

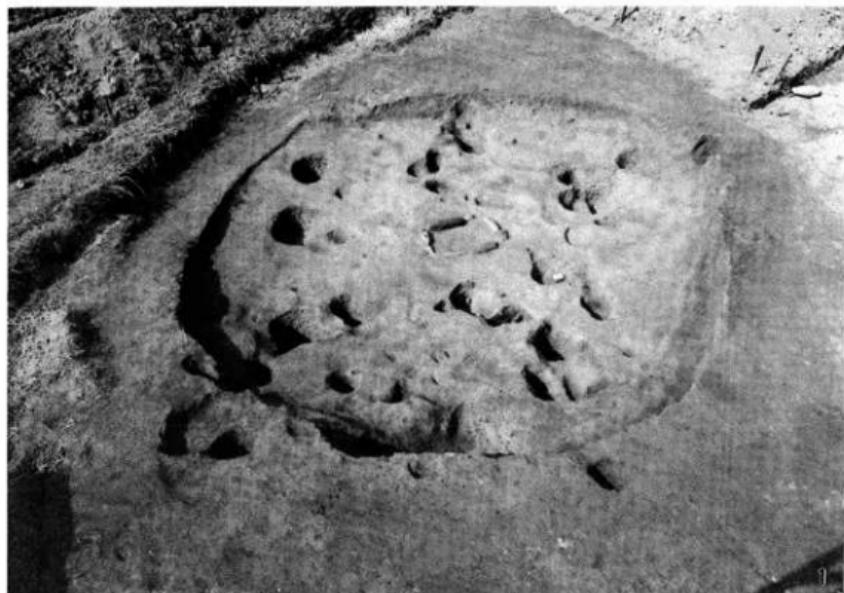


第14図 滝谷遺跡出土の遺物 1.~3.土器 4.土偶 5.石器

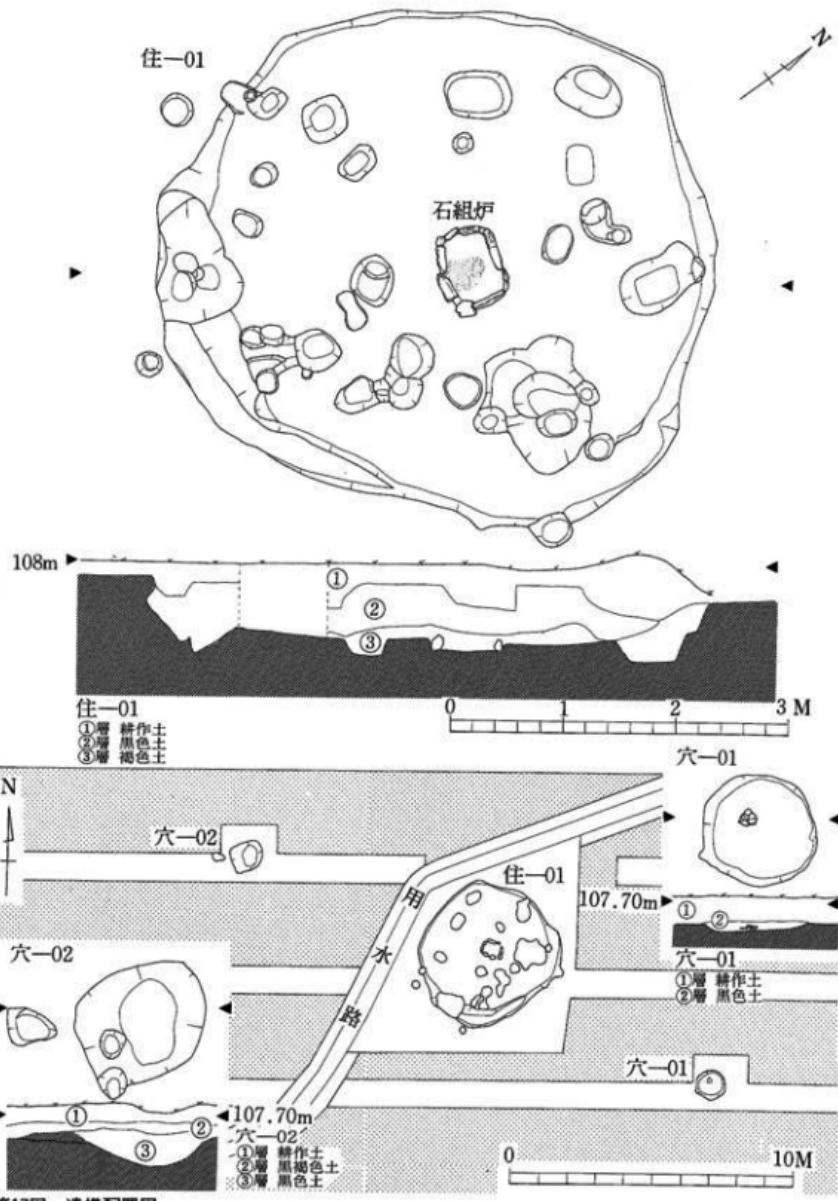
3 小滝谷遺跡



第15図 地形と発掘区



第16図 住居跡と作業風景 1.2.1号住居跡 3.穴-02 4.穴-01 5.作業風景



遺構

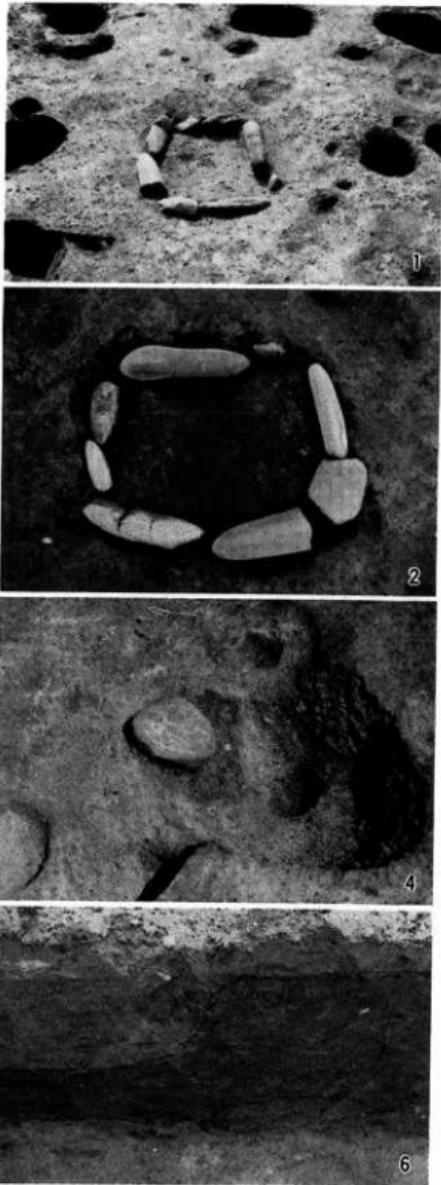
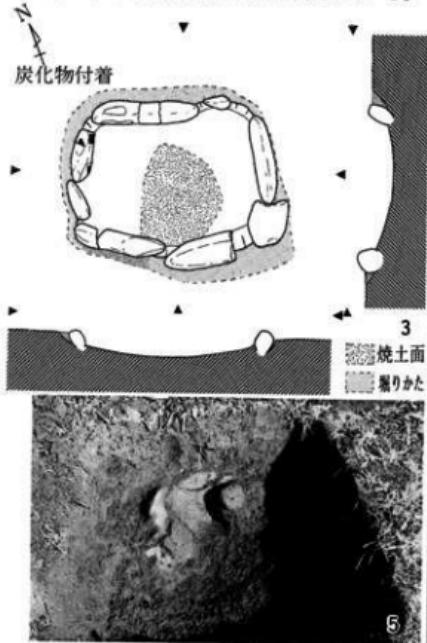
住居跡三つ、六二つを確認し、うち住居跡一つ、穴二つを完掘した。

住一〇一（第17図）4.5m×5mのやや脛の張った隅円方形を呈する。主柱本数を六本ととり、主軸両端の柱穴が棟木を又首状に支える「棟木支え型」Y型が復元される。〔橋本1974・1976〕炉は、1.2m×1.5mの単式長方形石組炉で、炉石は河原石を用いる。炉底は浅く平坦で赤く焼けている。炉石には、タール状の炭化物の付着が認められる。

住居跡と炉の主軸は、通常同一線上に並ぶが住一〇一の場合約45°のズレをもつ。平面規模の拡張、炉の改造など住居の作り替えが予想される。覆土中の土器は数期に亘るがすべて細片である。

県内の縄文時代住居跡は、前期後葉～中期中葉の時期、炉を二つ以上設ける複設炉と、一つだけの単設炉の二つの流れがある。中期中葉の場合、小杉町水上谷遺跡は前者、立山町二ッ塚遺跡やこの住居跡は後者に相当する。

穴（第17図）径1mの円形で底面の平坦な穴一〇一と、径1.2mのすりばち状断面の穴一〇二がある。いずれも中期中葉の土器が出土している。



第18図 遺構・遺物の検出状況 1.2.石組炉 3.石組炉実測図(%) 4.住居跡内ピット 5.土器出土状況 6.住居跡断面図

遺物

遺物は、縄文時代に属する土器、石器であり、住居跡、穴、各試掘区（包含層）から出土している。

縄文土器 土器は、ほとんどが細片である。時期は大きく中期前葉、同中葉、後期前葉の三期にわかれるとそれぞれさらに細かな変化を認めることが可能。

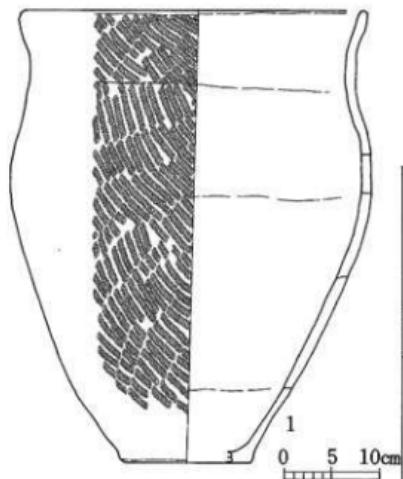
中期前葉 円板状の小突起、口縁端部をめぐる爪形文、蓮華文の特徴は、新崎式に相当する。ただおり返し口縁を有する1・2はその中でも古手に属し嚴照寺I式と呼ばれる。[神保他1977] (第19図)

中期中葉 中期中葉の土器群に関して、その時間的な変化をより細かく跡づけようとする場合、隆起線を基線にもつ深鉢形土器が便利である。それは、基線を軸とする胴部文様帶、口唇部を含む口縁部文様帶、半截竹管文が継続に施される胴下部文様帶に分かれ、それぞれがほぼ次のように変化する。(口縁部文様帶) 口縁部に半隆起線をめぐらし、口唇部が内傾するため断面が丸いものから、口縁部を無文帶とし、口縁部が外傾するため断面が偏平になる。(胴部文様帶) 基線が一見不規則ともみられる縦横に流れるものから、S字状の單純なくくり返しに変わり、ついに隆起線でなくなり、基線上の刻みも爪形文→ヘラ刻み→無文となる。

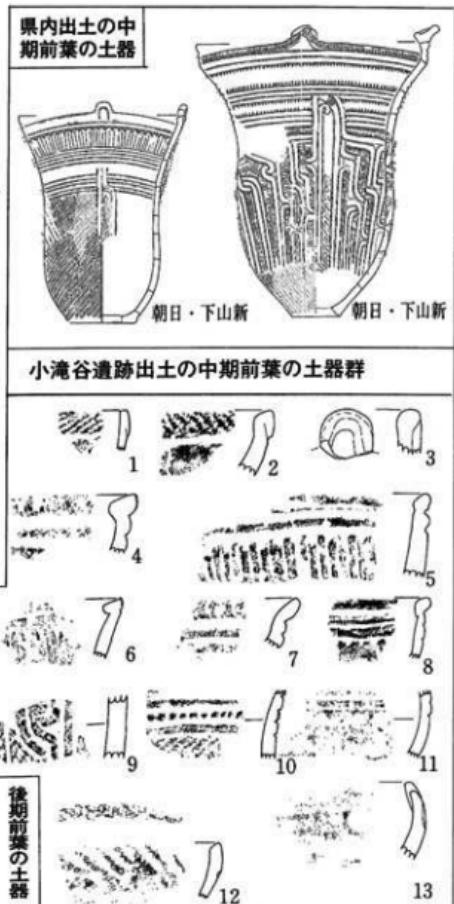
(胴下部文様帶) 胴部文様帶との分離があいまいで、その境が花弁状のものから、明確にわかれ、2~3条単位の半帶隆起線を垂下させるだけにな

る。以上の傾向を、本遺跡の土器に照らしてみると、第20図1~4→15~19、5~10→20、23、12~14→33へとそれぞれ二つの変化が認められる。前者は、天神山式にあたり、その中でも最も新しい部分で、宇奈月町寺藏遺跡II期C種[酒井1977]に、後者は牛滑式にあたり、小杉町水上谷、立山町二ツ塚遺跡に類例が求められる。[神保他1977] (柳井他1978)

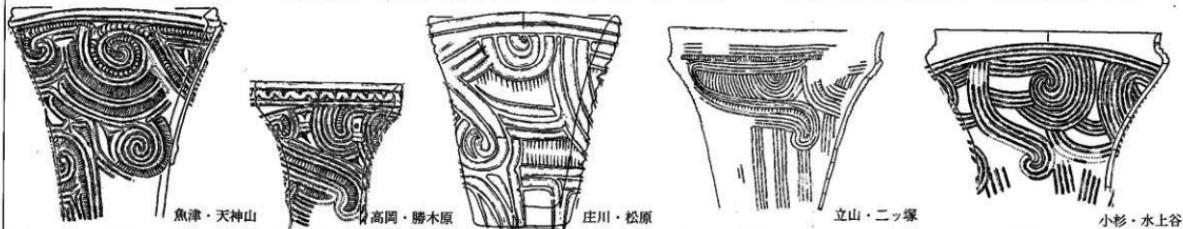
後期前葉 三角形連続押し引き文をもつには気屋式の特徴である。[高堀他1951] (久々)



第19図 小滝谷遺跡出土の土器



中期中葉の深鉢形土器



魚津・天神山

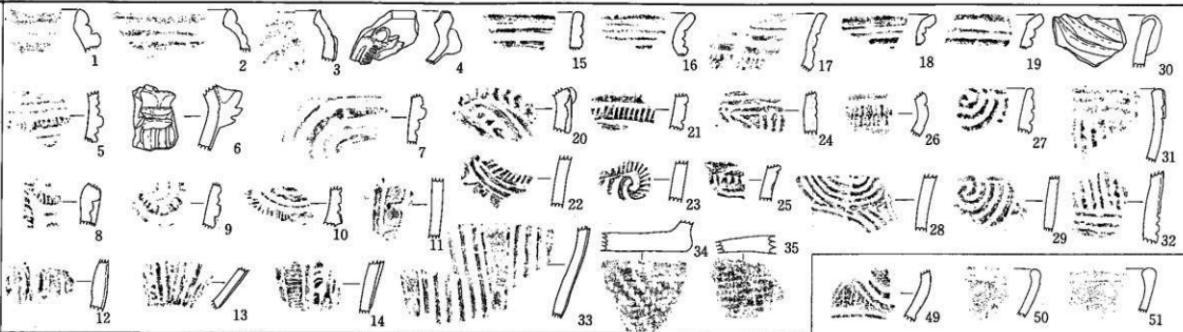
高岡・勝木原

庄川・松原

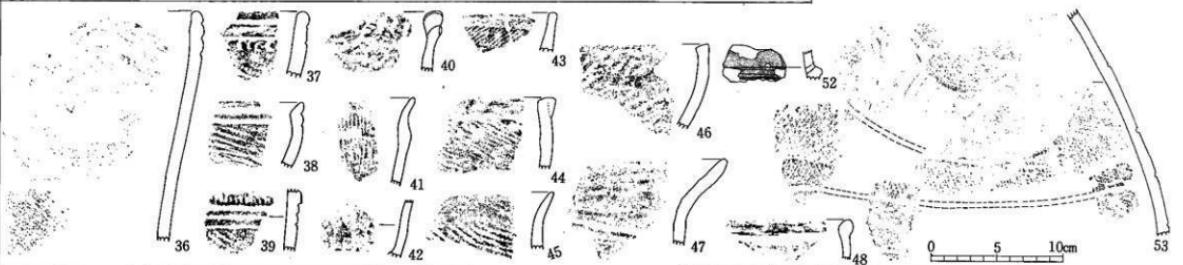
立山・ニッ塚

小杉・水上谷

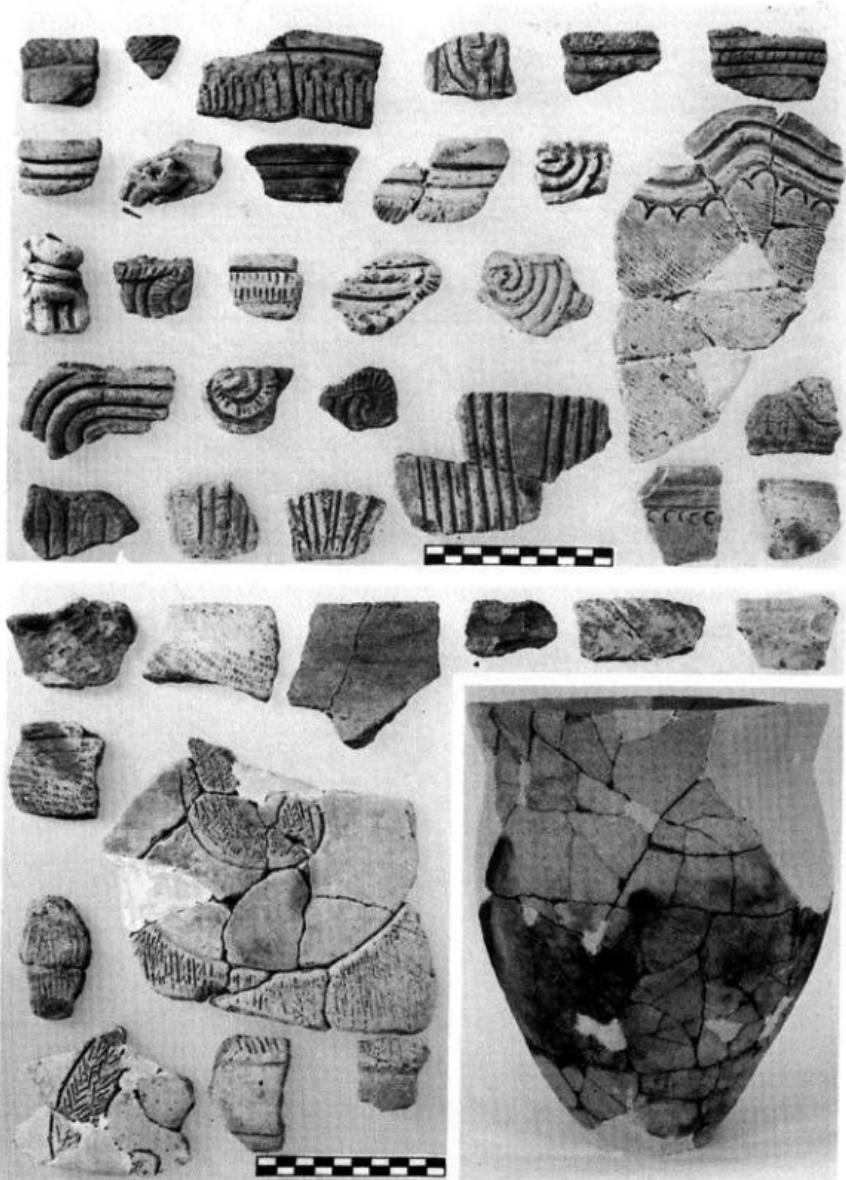
小滝谷遺跡出土の中期中葉の深鉢形土器



その他の土器



第20図 小滝谷遺跡出土の土器群



第21図 小滝谷遺跡出土の土器

石器 (第24・25図 1~29)

石鏸 (1) 無茎で、基部が抉られている。全體を丁寧にしあげている。石材は、黒曜石で、重さは、3g。

石錐 (2~19) 石錐は、その重量より考へると、21~90gのものと、251~550gのものとに分かれる。長さと巾との関係では、巾1~3cm、長さ4~8cmのものと、巾9~13cm、長さ2~4cmのものとに分かれる。8~16・17~18は、住-01のふく土より出土した。石錐は、漁網用の錐としてもなく、編物用の錐具としても使用されたこともある〔渡辺編 1978〕ことから、重さ250g以上の石錐のうち、後者の例として使用されたものもあるうか。

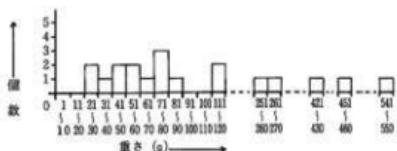
凹み石 (20~26) 敲打痕のある凹みが、片面にあるものと、両面にあるものとがある。形態は、だ円形と長方形のものに分かれる。25は、石錐からの転用か。26は、両側面に磨耗痕があり、風化が著しい。すべて、住居跡のふく土より出土した。

磨製石斧 (27~29) 27・28の石材は、蛇紋岩で、29は、硬質砂岩系のものである。28・29は、住-01のふく土より出土した。

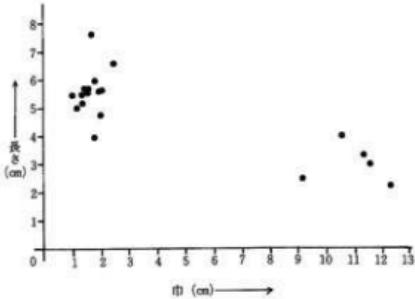
以上、本遺跡の石器の特色は、出土した石器の大半が石錐・凹み石であったことと、打製石斧が出土しなかったことである。同じ中期の滝谷遺跡では、石斧だけしか出土していないのである。

石器の組成から見ると、近接するこの2つの遺跡の違いを、どのように考えればよいのであろうか。

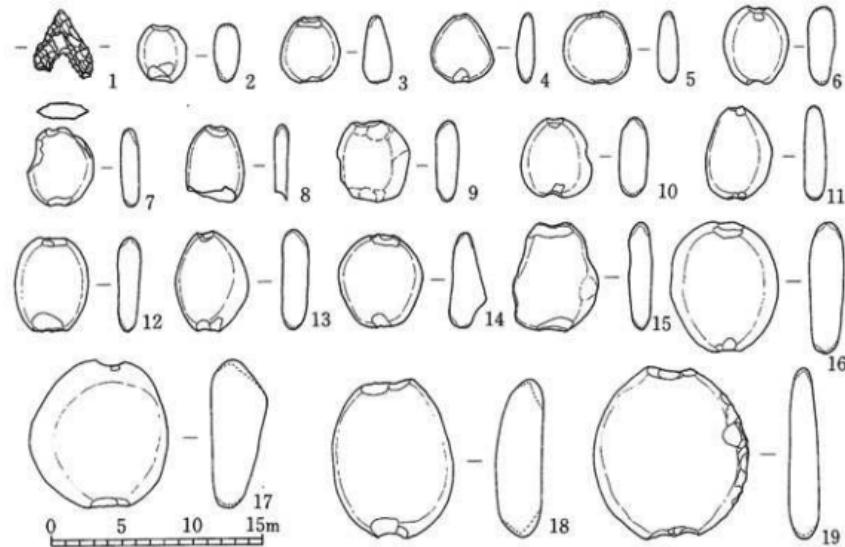
(岡上)



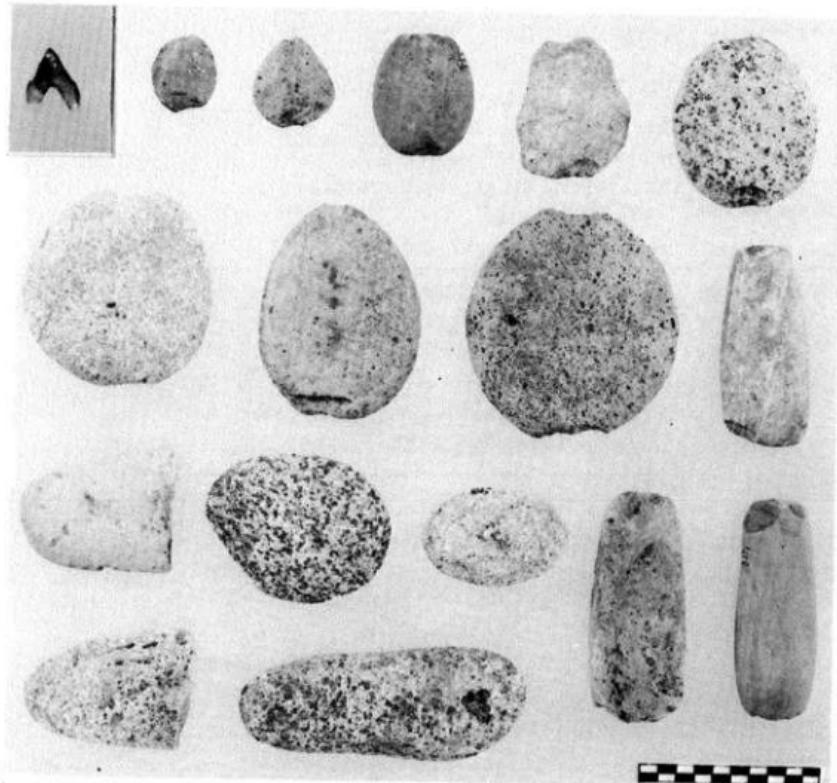
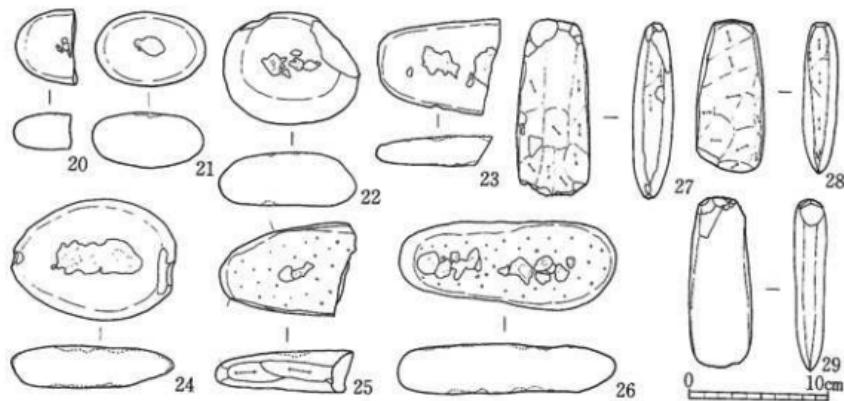
第22図 石錐の重量分布図



第23図 石錐の長さと巾の関係図



第24図 小滝谷遺跡出土の石器



第25図 小滝谷遺跡出土の石器

V まとめ

前章までは、外輪野中部地区で発掘調査した、三遺跡について、個々にその概要を記してきた。ここでは、その要約を含めて、婦中町に所在する他の縄文時代遺跡群の動向をたどってみよう。

1. 滝谷遺跡では、縄文時代中期前葉の住居跡2棟、小滝谷遺跡では中期中葉の住居跡3棟を発見し、うち1棟を完掘した。婦中町には、牛滑遺跡で3棟、鏡坂I遺跡で1棟、道島遺跡で3棟の中葉に属する住居跡が確認されている。〔岡崎1966、柳井・久々1979〕滝谷遺跡の住居跡は、今のところ婦中町で最も古い時期に属する住居跡である。小滝谷、牛滑、鏡坂I、道島遺跡は、中期中葉の中でも牛滑式という一型式に属するもので、滝谷遺跡とは5~6型式の時期差をもち、限られた地域に、限られた時期の住居跡が集中的につくられていることになる。

2. 婦中町の遺跡は、その立地から、舟羽丘陵のつけ根にあたり、神通川の扇状地に面する丘陵地に分布する遺跡と、山田川に沿った谷あいの段丘上に分布する遺跡と二グループがある。行政区分では、前者は古里地区、後者は音川地区と呼ばれる。

古里地区の遺跡は、組織的な調査は行なわれていないが、古くから多くの収集家によって踏査され、たくさんのが採集されている。その所属時期について不明なところが多いが、富山市平岡遺跡などで草創期・早期の遺物が採集され、隣接する二本桜遺跡では、中期・後期の遺物が出土している。各頤寺前、古里保養園前遺跡では中期の遺物があり、だいたい各時期にわたって縄文人の足跡をたどることができる。これに対して、音川地区では、草創期~前期は全く不明であるが、中期中葉の一時期突然遺跡が増え、縄文人の活発な活動がみられる。その後も続かず、上池上遺跡で後期後葉の穴が一つあるのみである。山田川水系の鏡坂I、小滝谷、牛滑、道島遺跡は、2~3kmごとに点在し、それぞれ拠点的な集落を形成していたものと考えられる。ある一時期に限って、このような集落を作らせた理由は何であったろうか、それを支えた縄文人は、どこからきて、どこへ移っていたのであろうか。現段階では問題の提起にとどまる。

引用・参考文献

- ウ 上野章・酒井重洋・神保孝造 1976 「富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群第4次緊急発掘調査概要」富山県教育委員会
- オ 岡崎卯一 1966 「婦中町牛滑遺跡の調査」『大境』第2号 富山考古学会
- コ 小島俊彰 1966 「東砺波郡井口遺跡出土遺物の紹介」『大境』第2号 富山考古学会
小島俊彰 1974 「北陸の縄文時代中期の編年一戦後の研究史と現状」『大境』第5号 富山考古学会
- サ 酒井重洋・橋本正春 1977 「富山県宇奈月町浦山寺遺跡緊急発掘調査概要」宇奈月町教育委員会
- シ 神保孝造・岡上進一・松本幸治 1977 「富山県砺波市嚴照寺遺跡緊急発掘調査概要」富山県教育委員会
神保孝造・岡上進一・橋本正春 1978 「富山県砺波市宮森新北島I遺跡緊急発掘調査概要」富山県教育委員会
- タ 高堀勝喜・久保清 1951 「河北郡字ノ氣町氣屋遺跡」『石川考古学研究会会誌』第3号
- ヌ 沼田啓太郎 1976 「金沢市大桑町中平遺跡報告」『石川考古学研究会会誌』第19号
- ハ 橋本正・神保孝造 1974 「富山県小杉町水上谷遺跡緊急発掘調査概要」富山県教育委員会
橋本正・柳井鶴・池野正男・酒井重洋 1978 「富山県立山町二ツ塚遺跡緊急発掘調査概要」富山県教育委員会
橋本正 1976 「豊穴住居の分類と系譜」『考古学研究』第23卷第3号
- フ 婦中町役場 1967 「婦中町史上巻」 婦中町
- ヤ 山本正敏・神保孝造・松本幸治 1978 「富山県婦中町細谷遺跡群第一次緊急発掘調査概要」富山県教育委員会
柳井鶴・久々忠義他 1979 「昭和53年度富山県埋蔵文化財調査一覧」富山県教育委員会
- ワ 渡辺誠編 1978 「福井県勝山市古宮遺跡発掘調査報告書」勝山市教育委員会



調査に参加した人々

富山県婦中町外輪野地区
埋蔵文化財予備調査概要

発行日 昭和54年3月31日
発行者 婦中町教育委員会
編著者 神保孝造・岡上進一
久々忠義
印刷者 (有)日本海印刷